

## 「生ききる」を支える

### ——さまざまな看護実践の場からの提言——

座長：井上 智子<sup>1)</sup>，吉田 千文<sup>2)</sup>

本シンポジウムは、人びとが最期のそのときまで、自分の人生を「生ききる」ことを支えることは、看護が社会に対して果たす責務であるという本学術集会の強いメッセージのもとで企画された。「生ききる」とは、そして「生ききる」を支えるとはどういうことなのか、クリティカルケア看護、在宅看護、そしてがん看護の、異なる看護領域において専門家として実践・研究を積み重ねておられる3人のシンポジストの提言をもとに、参加者がいっしょになって討論を深めた。

北村氏は、クリティカルケアでの「生ききる」を支えるについて、生死の分岐点にいる患者に対する生還に向けたケア、つまり身体が力を出せるように働きかけるケアの重要性を強調した。そして、不確実で侵襲的な治療に伴う心理的・実存的苦悩に対するヒューマンケアリングが、患者と家族の双方に必須と述べた。

山内氏は、まず、「生ききる」の概念について言語学的検討をもとに「ある限りを出して生きる」と提示した。そして、声を喪失した頭頸部がん患者の研究をもとに、「生ききる」とは患者が本来有する関係性についての欲求を基盤に、粘り強く努力する一連の過程と時間軸の視点を示した。そして「生ききる」を支えるとは、患者が欲求をエネルギーに転換する好機を見極めて、より力を発揮できるようにすることと述べた。

長沢氏は、難病の自宅療養者とその家族への長期にわ

たる看護実践を紹介した。そのなかで、身体機能の低下が進行する状況下で「生ききる」を支えるには、療養者が人間として存在し、家族が共に生活できる療養環境を創出することの重要性を述べた。また、療養者の「手」となって身体の果たす機能を支えるケアの大切さを語った。

会場を交えた討論での意見の概要は以下のようにまとめられた。「生ききる」とは、必ずしも生を完了することではなく、さまざまな場で「生ききる」ということがあると気づき、より概念が広がった。いまそのときをその人らしく「生きる」という連続、それを時間軸でとらえたときに、「生ききる」といえるのではないか。「生ききる」を、「ある限りを出して生きる」ととらえると、意志、強さを感じる。「生ききる」を支えるとは、ケアの相手の全体性をとらえて、命を紡いでいくプロセスに、「ケア」としてかわり続けること。とくに、心理社会的なかかわりとともに、身体に直接働きかけるケアと希望を支えるケアは「生ききる」ことを支えるために重要ではないか、ということである。

シンポジウムは、参加者の多くを深い思索に導き、多様な状況にあって生きる人びとへの畏敬の念と、その命にかかわる看護の価値への認識を新たにするものになったと考える。

1) 東京医科歯科大学大学院、2) 聖路加看護大学